信州大学所蔵石井鶴三関連資料信書差出人に見る 長野県教育関係者人脈【報告】

大　島　賢　一　　（信州大学教育学部）

1、 はじめに

信州大学所蔵石井鶴三関連資料（以下、石井鶴三関連資料と記す）全28,907点のうち、仮目録では11,017点が信書として分類されている[1]。これらの信書には、美術関係者や、石井鶴三が挿絵画家としてかかわった文学関係者からのものの他に、石井が生涯にわたって深くかかわった長野県の教育関係者からのものが含まれている。

報告者は、大正期から長野県の教育に関わりを持った石井がどのような人物と交流し、長野県教育にどのような影響を残したのかについて明らかにする事を目的として、長野県教育関係者からの信書について、整理及び調査を進めている。

本調査の実施に当たって、石井鶴三関連資料中の信書11,017点から、長野県教育関係者からのものと思われるものを選別する必要があった。そのために次の作業を行った。石井鶴三関連資料については、差出人、発送地などの基礎情報が入力されたデータベースが作成されている[2]。そこで、このデータベースに基づき、信書11,017点の中から、発送地を長野県内とするものを選別した。しかし、信書の中には汚損や封筒の損失などによってデータベース上発送地不明となっているものがあり、発送地による選別だけでは除外されてしまうものがあった。そこで、発送地によって選別された信書の差出人をリストアップしたのち、データベースに記載された差出人情報から、改めてそれぞれの差出人の信書を選別していった。

上記の作業によって、石井鶴三関連資料中に長野を発送地とする信書が一点以上確認された者は265名おり[3]、それぞれを差出人とする資料として1,140点を暫定的な調査対象として選定した（2015年12月現在）。差出人の一覧と差出人毎に確認された信書の点数について、添付資料１に示す。

データベース上差出人、発送地ともに不明となっている信書が存在しているため、信書現物にあたり精査を行っていく中で、調査対象となる信書の点数については今後増加することが考えられる。また、差出人の中には、一時的に長野に滞在した他県の人物など、長野県の教育とは関わりのない人物も相当数含まれると考えられるため、各差出人についての調査が必要である。そこで現在、選定した信書についてスキャニングしてPDF化したのち、判読、精査を進めると同時に、長野県教育史関係書籍資料などによって、それぞれの差出人の略歴などについて調査を進めている。

本稿では調査の途中報告として、石井鶴三関連資料中の信書差出人に含まれる長野教育関係者のうち、石井鶴三関連資料中に複数の信書の存在が確認されたものを中心に「上田彫塑研究会の人々」「上田彫塑

研究会以外の人々」「信州大学教育学部との関わり」に分類し、その略歴等を示すことで、石井と長野県教育関係者の関わりの一端を明らかにする。

2、上田彫塑研究会の人々

石井鶴三は1924(大正13)年から1970(昭和45)年まで、1945(昭和20年)を除く毎夏、講師として長野県上田で開催された彫塑講習会(第1回目は上小教育会主催、2回目以降は上小彫塑研究会(1961(昭和36)年に上田彫塑研究会に改称)が主催)の指導にあたった。信書の差出人の中には、この講習会の主催団体である上田彫塑研究会に関わる人々が含まれる。その中でも、1924(大正13)年に上小教育会主催の粘土講習会を企画し、倉田白羊の紹介で石井鶴三を講師として招聘した小林三郎を差出人とする信書が石井鶴三関連資料中に121点存在している。小林は上小教育会が主催から外れた1925(大正14)年には有志による研究会として上田彫塑研究会の前身となる上小彫塑研究会を立ち上げ、1970(昭和45)年に逝去するまでその会長を務めている。

小林三郎の経歴については、1984(昭和59)年に出版された作品集『小林三郎』[4]に詳しい。小林は、1892(明治25)年長野県下水郡木嶋村坂井の農家に生まれ、1909(明治42)年長野県立長野中学校飯山分校を卒業すると、画家を志し東京美術学校予科に入学する。しかし、同年秋の台風による千曲川の氾濫、農作物の不作という事態から仕送りが途絶えたため、退学ののち帰郷。翌1910(明治43)年から信州中野町の中野小学校の代用教員を2年間勤めた後、1912(明治45)年長野県師範学校第2部に入学、1913(大正2)年3月卒業した。同年4月に任上水内郡小田切尋常小学校の訓導となり、以降1939(昭和14)年に滋野尋常高等小学校訓導兼校長を最後に小学校教員の職を辞すまで小学校教育に関わり、その後は上田高等女学校、上田中学校で美術教師を務めている。1970(昭和45)年死去。

小林は、上田での彫塑講習会の他にも、1927(昭和2)年から1943(昭和18)年にかけては上小地区手工研究会を組織し、漆工、版画、木彫、木工の講習会を開催したり、また、南佐久教育会、北佐久郡教育会、埴科郡埴南教育会、上水内郡西武教育会による彫塑、陶芸の講習会などで講師を務めたりするなど、長野県の美術教育の中心的存在であった。小林の長野県美術教育界での影響力は、1947(昭和22)年に創立された長野県全県を対象とした長野県美術教育研究会の設立に関わり、その初代会長(1946-1949)を務めたことからも伺うことができる。

小林を差出人とする信書の中には、第一回講習会開催にあたって参加申込者を石井に伝える2点の信書(仮番号[書簡3-133])(仮番号[書簡3_138])が確認されている[5]。これらの資料では第一回彫塑講習会申込者として小林三郎を含めた38名の名前が確認できる。この申込者のうち、小林三郎以外には田玉孝平(52点)、花岡たかよ(14点)、増田安衛(10点)、赤羽国武(7点)、町田則義(7点)、小山良一(1点)を差出人とする信書が、石井鶴三関連資料中に確認されている。また、欠席者の代理として参加した[6]ため上記の信書に名前の記載がないが、第一回彫塑講習会参加者である鷹野悦之輔を差出人とする信書13点も確認されている。

これらの人物の中で、田玉孝平は信濃教育会が1930(昭和5)年に長野県師範学校の石田岩雄を委員

長として組織した手工教授調査研究委員となっていることが確認できた[7]。この委員会の研究成果は、1931(昭和6)年の『信濃教育』537号に「手工科教授細目について」として発表された[8]。『長野県教育史』によると、この細目案は全県下に配布され、「国民学校になるまで長野県手工教育の基準となった」[9]という。こうした資料を精査することで、田玉のような人物を介して石井の美術や教育についての思想が長野県全体にどのように伝播して行ったのかということを明らかにすることが今後の課題となる。

1974(昭和49)年に上田彫塑研究会50周年を記念して小県上田教育会より発行された『石井鶴三先生－信州上田と－』には、1974(昭和49)年7月当時の上田彫塑研究会会員名簿が掲載されている。この名簿では、第一回彫塑研究会参加者の小林三郎、田玉孝平、赤羽国武、町田則義、鷹野悦之輔、黒崎弘を含め、51名の名前が確認できる。これらの人物のうち、先ほど示した第一回講習会参加者のものの他に、岡田益雄(48点)、田原幸三(19点)、増田国雄(12点)、滝沢石(11点)、牧岩太郎(4点)、塩沢貞雄(3点)、田原正章(1点)を差出人とする信書が石井鶴三関連資料中に確認できた。

岡田益雄は小林三郎逝去の後、1971(昭和46)年に上田彫塑研究会の会長を引き継いだ人物である。上田彫塑研究会には1935(昭和10)年の講習会より参加し[10]、1950(昭和25)年には、東京藝術大学の石井鶴三研究室へ一年間の内地留学をしている[11]。

岡田を差出人とする信書48点のうち41点は、1973(昭和48)年の石井鶴三没後に遺族の石井蹊子らに宛てられたものである。これらの書簡の中には先述の上田彫塑研究会50周年記念事業としての『石井鶴三先生－信州上田と－』の発行に関わるもの(仮番号[書簡12-11])(仮番号[書簡12-12])や、石井鶴三作品のための美術館建設に関わるもの(仮番号[書簡12-15])(仮番号[書簡12-17])などが確認できる。こうした資料は長野県の教育者たちが石井鶴三をどのように語り継ぎ、顕彰していこうとしていたかということを明らかとする手がかりとなるだろう。

岡田の上田彫塑研究会会長就任時に同会副会長となった滝沢石は、1985(昭和60)年7月25日に信濃教育会賛助会員総会にて「石井鶴三先生と信州教育」と題した講演を行なっており、この講演筆記が『信濃教育』第1190号に掲載されていることが確認できる[12]。この講演筆記が掲載された『信濃教育』の編集後記によると、滝沢は、長野県師範学校を卒業後長野県内の義務教育に従事し、1974(昭和49)年退職ののち、昭52年より上田市教育長を務めている。また、1962(昭和37)年の諏訪養護学校設置時には、その初代校長を務めている[13]。特別支援教育の分野では、『信濃教育』第963号に「肢体不自由養護学校の健康管理とその教育」[14]を寄せている。石井に関わり、石井を師と仰ぐ教育者たちは、この滝沢のように美術教育のみならず、長野県教育界の様々な分野で活動していると考えられる。

3、上田彫塑研究会以外の人々

石井鶴三関連資料の中に、48点の信書が確認された長坂きくじは、15点の信書が確認された長坂利郎の夫人である。

長坂利郎については、遺稿集『長坂利郎遺稿並びに追憶』[15]が出版されている。これによると、長坂利郎は、1887(明治20)年小県郡東村生まれ、1905(明治38)年長野県師範学校入学、1909(明治42)

年卒業し、小県郡泉田尋常高等小学校訓導となった。1910(明治43)年4月には、東京高等師範学校に入学し、同郷の務台理作[16]と寄宿舎で同室となり親交が始まる。しかし、同年6月「泉田生活の楽しさ、小学校児童の愛らしさを忘るゝ能わず望郷の念嵩じて先輩知友の引き留めもきかず」[17]東京高等師範学校を退学し、15日には泉田尋常高等小学校に復職、その後は、長野県内各所の小学校にて教育に尽力し、1943(昭和18)年に死去した。

1921年(大正10)年、上田尋常高等小学校南校部長職に任じられた長坂は、同僚であった小林三郎の提案に賛同し、上小教育会にかけあって、前述した1924(大正13)年の上小教育主催の第一回講習会の開催に尽力した。小林は長坂を「文学音楽絵画彫刻等を好きで良く鑑賞」し、これらを重んじる「芸術のわかる方」であると評し、上田彫塑研究会の生みの親、育ての親としている[18]。

長坂は上田の他に長野市でも1937(昭和12)年に自身が会長となり長野市図画研究会を組織し、石井鶴三を講師として招聘し、以降1943(昭和18)年まで図画講習会を開催している。本会は、長坂の逝去や第二次世界大戦の混乱による休止を挟んで、1946(昭和21)年に、後に信州大学教授となる田原幸三を会長とし、長野美術研究会に組織を改め継続。戦後の長野の美術教育の一つの拠点となった[19]。

長野県教育史において長坂は、美術教育の方面とともに、東西南北会や、信濃哲学会との関係によって位置付けられる。

東西南北会は、手塚縫蔵、斎藤節らの長野県の教師によって1911(明治44)年頃結成された。この会は、当時三宅雪嶺が主催していた「日本及び日本人」の読者欄「東西南北」にちなみ、長野の東西南北から集まったものが「天下第一の人格者を招いて、その人と語ることによってお互いの人格の向上をはかる」[20]目的を掲げ、三宅雪嶺、犬養木堂、杉浦重剛、池辺三山、千頭清臣、古島一雄などを招いての研究会を行っている。この東西南北会は1915(大正4)年の星菊太郎長野師範学校長排斥事件を引き起こした。星菊太郎長野師範学校長排斥事件とは、当時長野県師範学校校長であった星菊太郎の教育方針が長野県人に対するものとしては不適格であるとして、東西南北会代表12名が師範学校にて星と会見し、辞職勧告を行った事件である[21]。事件の顛末は1915(大正4)年の『長野新聞』(2月22－24日)[22]で報じられるなどし、県行政当局や信濃教育会を巻き込んだ一事件となり、代表12名は1年間の休職処分となった。長坂はこの排斥事件において、1915(大正4)年の『長野新聞』(1月1－3日)に本事件のきっかけの一つとなった告発文「敢て校長星菊太郎氏の猛将を促す」[23]を発表するとともに、休職処分となった代表委員12名に名を連ねるなど中心を担った人物の一人であった。

信濃哲学会は、1920(大正9)年に当時の後町小学校校長であった守屋喜七を会長として設立された。この会は、西田幾多郎に私淑する長野師範学校卒業生を中心として、前述の務台を媒介として西田の承諾を得た上で結成された「西田幾多郎から西田哲学を聞く会」である。長野師範学校や京都府教育会館などで、西田本人や務台らを講師とする研究会を開催した[24]。長坂は本会に幹事として中心的に関わった。

長坂は、人格主義的な大正期新教育思潮の只中に身を置き、教育における教師の人格や教養、そして芸術文化の理解を重視した人物であった。1933(昭和8)年より信濃教育会雑誌編集部委員、翌1934(昭和9)年より同委員長を務めるなど、長野県教育界の中枢にあった。この長坂と石井との関わりは、大正期新教育思潮の影響を受けた長野の教師たちの間において、石井や芸術教育がどのような意味、位置

を占めたかということを伺う手がかりとなるだろう。

石井鶴三関連資料中に32点の信書が確認されている小野惣平については、すでに『石井鶴三書簡集Ⅰ 石井鶴三・小野惣平往復書簡』[25]にまとめられている。

この書簡集に付された略年譜によると、小野惣平は1902(明治35)年長野県飯田市生まれ、1923(大正12)年に長野県師範学校を卒業し、以降長野県の小学校教師を務めている。1961(昭和36)年に後町小学校の校長となるとともに、長野県小学校校長会の会長を務めるなど、長野県教育界の中枢にいた人物であるということがうかがえる。1964(昭和39)年に後町小学校校長職を最後に教職を辞したのちは、信濃教育会に勤務し、1975(昭和50)年に退職するまでの間、第10代編集主任として『国語』『理科』の教科書などの編集とともに、機関紙『信濃教育』の編集に関わっている。特に彼の編集後記は往時の『信濃教育』の名物となり、それによって購読数が1000部から4000部に増加したとある[26]。

小野と石井との関わりは、1950(昭和25)年に、当時下伊那郡市田小学校校長職にあった小野が、児童画展覧会の審査を石井に依頼したことに始まる。図画教育を特集している『信濃教育』第827号に掲載された小野の「図画教育雑感」[27]では、この時、小野が自ら近隣の小中学校の児童生徒作品140点あまりを背負い、石井の弟子である笹村草家人が当時疎開していた山梨県北都留郡上野原町を訪ねて石井と落ち合い、そこで石井が児童画の審査を行ったこと、そして、石井が児童の作品に真剣に向き合う様に感じ入ったことを回顧しながら、そのように教育者が児童の作品一点一点に向き合うことの大切さを説いている。

小野はこの文章の他にも、編集後記などでたびたび石井に言及している。また、石井没後の『信濃教育』1044号石井追悼号[28]の企画、編集を行い、さらに、1974(昭和49)年4月の1049号から1976(昭和51)年3月の1072号までの2年間、「信州の美術」として石井鶴三の作品グラビアと上田彫塑研究会会員などによる作品解説からなる口絵特集を企画している。長野の教師たちに対する大きな発信力を持っていた小野は、石井鶴三とその芸術思想を長野教育の伝統の中に位置付ける役割を果たしていたと考えられる。

上田彫塑研究会関係者及び、長坂、小野の他にも、石井鶴三関連資料の中には長野県各地域の教育関係者を差出人とする信書が含まれている。本稿では複数の信書が確認された伊藤真之助(20点)、林勇(14点)について紹介する。

伊藤真之介については『長野師範人物史』[29]に記載が見られる。それによると、伊藤は1892(明治25)年下伊那郡伊賀良村生まれ、1912(大正元)年長野県師範学校第四種講習所を卒業し、図画・手工科の専科正教員の免許状を取得し、同年下伊那郡松尾小学校専科訓導となる。以降、一貫して長野の美術教師を務めた。また、1944(昭和19)年から10年間上伊那図工教育研究会長を務めるなど、戦前から戦後にかけて、伊那地区の美術教育の中心的人物であった。『長野師範人物史』では、伊藤について「美術教育家・画家」として紹介しており、白滝幾之助や倉田白羊に師事したとある。画家としての伊藤は、1925(大正14)年には上伊那美術協会を設立し、以降30年間その協会長を務めている。

伊藤を差出人とする石井宛て書簡の内容は、1928(昭和3)年から1931(昭和6)年にかけて伊那で開催された彫塑講習会にかかわるやり取りである。

林勇は諏訪地区の美術教師である。1973(昭和48)年に発行された『林勇画集』[30]によると、1894(明治27)年長野県埴科郡五加村上徳間生まれ、1917(大正6)年に長野県師範学校を卒業し、南佐久郡平賀尋常高等小学校に赴任、1923(大正12)年諏訪郡上諏訪町高島小学校へ転任し、諏訪教育会図画委員会の主任となり、学童図画展や教員の作品展、講習会などを推進したとある。1948(昭和23)年には下諏訪美術会の設立にかかわるなど、在野の画家としても活躍した人物であったようだ。

林による石井鶴三宛て信書は、1931(昭和6)年から1934(昭和9)年にかけてのものである。この時期林は、前述のように諏訪教育会図画委員会の主任であり、児童の図画展を開催し、椿貞雄、木村壮八、石井鶴三などに批評を依頼した[31]とある。石井とのやりとりは、この図画展に関わるものと考えられる。

上田で始まった石井の講習会は、この伊藤や林のような共鳴者たちによって長野各地へと広がっていった。

4、信州大学教育学部との関わり

19点の信書が確認された田原幸三は、長野師範学校、信州大学教育学部の彫刻担当の教員である。田原の経歴については、『信州大学教育学部三十年史』[32]や『田原幸三作品集』[33]で確認できる。

田原は、1911(明治44)年長野市川中島生まれ、1931(昭和6)年に長野県師範学専攻科を卒業し、1932(昭和7)年には師範学校中学校高等女学校手工教員免許を受け、翌1933(昭和8)年より長野県師範学校訓導となっている。1940(昭和15)年には東京高等師範学校研究科(図画)を卒業し、島根県女子師範学校の教諭となる。1944(昭和19)年長野に戻り、長野師範学校助教授となる。途中長野県視学や長野県教育委員会指導主事を挟み、1950(昭和25)年より長野師範学校教授となる。1951(昭和26)年の師範学校閉校以降は、それまでも兼任であった信州大学教育学部の助教授となり、1967(昭和42)年に教授就任、1976(昭和51)年の退職まで学生の指導にあたっている。

田原は1933(昭和8)年に石井を講師として開催された長野市彫塑研究会で石井と出会っている[34]。この会は1935(昭和10)年まで3年間開催されたのちに、1936(昭和11)年からは上田の彫塑講習会に合流している。以来田原は上田彫塑研究会の会員となっているため、前述の会員名簿に田原の名が記載されている。

前述の通り、田原は長坂利郎が創設した長野絵画講習会を1946(昭和21)年に長野美術研究会として再組織し、その会長となっている。また、小林三郎が初代会長となった1947(昭和22)年の長野県美術教育研究会発足に当たっても中心的な役割を果たし、第4代会長(1958-1960)を務めている[35]。

16点の資料が確認できた宮坂彦一も、長野県師範学校、信州大学の教員である。専門は工作。

『信州大学教育学部三十年誌』[36]によると、宮坂は1904(明治37)年長野生まれ、1931(昭和6)年に東京高等師範学校図画工作手工専修科を卒業し、長野県師範学校の教員となっている。1949(昭和24)年から松本深志高校の講師となり、1954(昭和29)年より信州大学教授、1969(昭和44)年に退官している。長野美術研究会や長野県美術研究会などの教員研究団体にも深く関わり、1949(昭和24)年から1953(昭和23)年までは、小林三郎の後を受け、長野県美術研究会の2代会長(1949-1953)を務めてい

る[37]。

石井宛て宮坂信書の日付は1933(昭和8)年から1937(昭和12)年頃に集中しており、長野市彫塑講習会のための講師依頼や日程の調整などの連絡であり、長野県師範学校時代の宮坂の長野市彫塑講習会への関わりを示す資料である。

宮坂は、1974(昭和49)年発行の『長野県教育史第5巻』「第6章　美術教育」の執筆者である[38]。本書において宮坂は、「明治五年「学制」発布から昭和20年の終戦まで、約75年間における美術教育の変遷を記述」[39]しており、その長野県の美術教育史の中に、石井鶴三を以下のように位置付けている。

> 旧来の手工科教材の粘土細工は、その名称の示すように細工物で、手指の訓練をもとにして物形を正確に模造する技術指導が中心になっていて、立体造形の芸術性を欠いていた。石井の彫塑講習はこの粘土細工の教材研究ではなく、純粋な美術の本質研究を目的とした彫塑の勉強であったために、教師の美術的教養は高められ、また教育者としての自覚を促すところとなった。この成果が学校教育の中に生かされて、幼稚な粘土細工は芸術性を獲得して彫塑の地位を占めることになり、図画手工教材の中で、長野県の特色をもっとも良く発揮した水準の高いものとなって発展した。山本鼎は小学校の美術教育に絵画と彫塑とを課したいと希望したが、その彫塑は石井の指導によって結実した。
> (…中略…)
> 山本の自由画教育に見たような華々しい運動ではなかったが、地味で誠実な石井の彫塑研究会のたゆまざる努力は、長い年月の間に本県美術教育のうちに確固たる地盤を築き、また長野県美術教育の源泉ともなった。石井の芸術精神と人格に感銘した長野県の教育者は、石井への尊敬と信頼の念をいよいよ深め、相互に絶ち難い縁が結ばれていったのである。[40]

『信濃教育』の石井鶴三追悼号で、竹内隆夫(長野県美術教育研究会第7代会長(1970-1971)、石井鶴三関連資料中に1点の信書が確認されている)は、1937(昭和12)年、新卒1年目の夏休みに宮坂に勧められて石井鶴三の上田の彫塑講習会、長野の絵画研究会に参加したことを回想している[41]。田原や宮坂は、彼ら自身が石井を師と仰ぎ、その講習会を企画し自身も積極的に参加するとともに、その立場から、自分たちの下の世代の長野の教師たちと石井をつないでいく役割を果たしていたと考えられる。

5、おわりに

石井鶴三と長野県の教育者たちの間では、石井が上田の彫塑講習会の講師として招かれた1924(大正13)年から石井の没後までの長期間にわたる信書のやり取りがなされている。大正期、長野は白樺派教師たちや自由画教育運動に代表されるような、いわゆる大正期新教育の中心地の一つであり、長坂などはそうした教育の只中にいた人物であった。石井による彫塑研究会はそうした大正期の長野県の教育思潮の中で受け入れられている。そして、上田の彫塑講習会を皮切りに結ばれた石井と長野との関わり

は、各地域の教育会による研修会へと伝播していき、そのうねりは石井を講師として招いた人物たちによって1946(昭和21)年に長野全県を対象とした美術教育者の研究会「長野県美術教育研究会」を創設することへと結実していく。1983(昭和58)年に長野県美術教育研究会が発行した『長野県美術教育研究会沿革誌』において、当時の会長飛矢崎和彦は、この会を発足させた先輩教員たちは「いずれも石鶴三先生の教えを受けた人たちであり、その教えを実践しようとする情熱が本会を誕生させ、本会を貫く理念となっている」[42]と述べている。この研究会は現在も存在しており、毎年全県規模での研究会が開催されている。また、石井に関わった教師たちの美術教育分野以外での取り組みや執筆活動によって、石井の影響は美術教育のみならず、長野県の教育全般の伝統の一角を形成していったと見ることができる。

今後はそれらの人物や、信書差出人として確認できるその他の人物についても継続して調査を行うとともに、信書そのものの内容の精査を合わせて行うことで、石井と長野県教育界との関わりをより立体的に描いていきたい。

謝辞　本稿の執筆にあたり、小野文子先生にご助言をいただいた。厚く御礼申し上げます。

※本研究は、科学研究費補助金若手研究（B）（課題番号26870238）の助成を受けている。

---

1 後閑壮登「石井鶴三関連資料　仮目録作業から見る資料概要【報告】」、『信州大学附属図書館研究』Vol.1、2012、pp.105-117.

2 データベース作成の詳細については、松本和也「石井鶴三書簡の整理をはじめて：挿絵(画家)から近代文学・出版(研究)を考え直すために」、『信州大学附属図書館研究』Vol.1、2012、pp.21-39.を参照。

3 石井鶴三関連資料中に長野県を発送地とする信書の所在が確認される差出人には、石井鶴三本人や、石井美佐、石井柏亭、石井蹊子などの石井の親族が含まれるが、これらの差出人による信書については本調査とは別に扱うものとして、調査対象からは除外している。

4 小林三郎刊行委員会編『小林三郎』、小林三郎刊行委員会、1984.

5 この二点の書簡については、石井鶴三『石井鶴三全集』2巻、形象社、1986、pp.486-489.に翻刻して収録されている。

6 鷹野悦之輔「石井先生の事ども」、上田彫塑研究会彫塑五十周年記念特別委員会『石鶴三先生－信州上田と－』、小県上田教育会、1974、pp.144-147.

7 宮坂彦一「第6章　美術教育」、長野県教育史刊行会編『長野県教育史 第5巻 教育課程編』、長野県教育史刊行会、1974、p.367.

8 調査委員「手工科教授細目について」、『信濃教育』537号、1931、pp.78-89.

9 宮坂彦一、前掲書、1974、p.368.

10 岡田益雄「石井鶴三先生と上田彫塑研究会」、『信濃教育』1044号、1973、p.64.

[11] 岡田益雄他「座談　石井鶴三先生と彫塑講習五十年」、上田彫塑研究会彫塑五十周年記念特別委員会『石鶴三先生－信州上田と－』、小県上田教育会、1974、p.130.

[12] 滝沢石「石井鶴三先生と信州教育」、『信濃教育』第1190号、1986、pp.4-21.

[13] 長野県諏訪養護学校ホームページより　http://www.nagano-c.ed.jp/suwayogo/index.htm　(2015年12月30日確認)

[14] 滝沢石「肢体不自由養護学校の健康管理とその教育」、『信濃教育』第963号、1967、pp.92-96.

[15] 山浦政編『長坂利郎遺稿並びに追憶』、裾花書院、1948　増補改訂版として長坂利郎遺稿刊行会編『長坂利郎遺稿』、小県上田教育会、1968がある。

[16] 務台と信濃教育会との関わりについては金井徹「務台理作の信濃教育会における役割の検討—信濃哲学会を中心とした京都学派との関係に着目して -」、『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第61集、第2号、2013、pp.23-38. を参照。

[17] 長坂利郎遺稿刊行会、前掲書、1968、p.180.

[18] 同上、pp.247-248.

[19] 長野美術研究会については飛矢崎和彦「石井鶴三先生と長野美術研究会」、『信濃教育』1044号、1973、pp.114-117. を参照。

[20] 斎藤節「東西南北会について」、『信濃教育』第841号、1956、pp.64-67.

[21] 星菊太郎長野師範学校校長排斥事件については、小松進「星校長の排斥とその顛末」、『信濃教育』第841号、1956、pp.67-70. に詳しい。

[22] この記事については長野県教育史刊行会編『長野県教育史』第13巻、資料編7、1978、p1019-1022. に収録されているものを参照した。

[23] この記事については長野県教育史刊行会編『長野県教育史』第13巻、資料編7、1978、p901-907. に収録されているものを参照した。

[24] 信濃哲学会については、金井徹「務台理作の信濃教育会における役割の検討—信濃哲学会を中心とした京都学派との関係に着目して -」及び、菅沼知至「信濃哲学会と私」、『信濃教育』841号、1956、pp.87-91. を参照した。

[25] 石井鶴三、小野惣平『石井鶴三書簡集Ⅰ　石井鶴三・小野惣平往復書簡』、形文社、1996.

[26] 同上、p.175.

[27] 小野惣平「図画教育雑感」、『信濃教育』第827号、1955、pp.32-38.　石井鶴三、小野惣平『石井鶴三書簡集Ⅰ　石井鶴三・小野惣平往復書簡』pp.36-45. に収録。

[28] 『信濃教育』第1044号、1973.

[29] 市川本太郎、『長野師範人物誌』、信濃教育会出版部、1986、pp460-461.

[30] 林勇『林勇画集』、林勇画集刊行会、1973.

[31] 同上、p.5

[32] 信州大学教育学部三十年誌刊行会編『信州大学教育学部三十年誌』信教印刷株式会社、1982、p.490.

[33] 田原幸三作品集刊行会編『田原幸三作品集』、田原幸三作品集刊行会、1989.

[34] 同上、p.3.

[35] 参照、長野県美術教育研究会沿革誌編集委員会編『長野県美術教育研究会沿革誌』、長野県美術教育研究会沿革誌編集刊行会、1983.

[36] 信州大学教育学部三十年誌刊行会編、前掲書、1982、p.490.

[37] 長野県美術教育研究会沿革誌編集委員会編、前掲書、1983、p.299.

[38] 宮坂彦一、前掲書、1974、pp.224-430.

[39] 同上、p.224.

[40] 同上、p.363.

[41] 竹内隆夫「石井先生」、『信濃教育』1044号、1973、pp.107-110.

[42] 長野県美術教育研究会沿革誌編集委員会編、前掲書、1983、pp.3-4.

添付資料1　長野県を差出地とする信書を1点でも有する差出人とその信書点数（2015年12月現在）

差出人氏名	信書点数（点）
□川太郎	1
□田仁義	1
□野悟□	1
青木石秀	1
青木広助	2
赤崎武	1
赤杉新	5
赤羽國武	7
昭	1
当舎蛇男	1
安藤茂一	1
井口喜源治と研成義塾刊行会	1
池田信治	1
石□慎太□	1
石井泉	1
石井菊衛	1
石井潤	1
石井鶴三美術館	1
石井とをる	1
石井ゆたか	1
磯川準一	2
伊藤真之助	20
伊藤泰輔	2
伊藤利夫	1
茨城猪之吉	32
今井嘉幸	2
岩本堅一	13
岩本登美	13
上田市上小絵画研究会	1
上田市立博物館	4
上田小県資料刊行会	1
上田彫塑研究会	2
牛越好成	1
海野盛義	2
江崎園子	1
大倉源一郎・所四出男	1
大隈泰男	2
大部正規、□□□、小平勝雄	1
岡田とき	1
岡田益雄	48
萩原孝子	2
尾沢□□□	1
小野惣平	32
小原福治	4

差出人氏名	信書点数（点）
大和作内	10
勝野玉作	1
金田健男	1
上條憲太郎	1
蒲生俊興	1
唐木田高実	1
川上澄生	2
川口五男人	5
河越虎之進	1
川村慎一郎・和気	1
木曽木彫研究会	1
喜多	1
北沢収治	1
喜多武四郎	1
木下	1
木下茂男	2
木村五郎	31
郷土社	1
久保田夏樹	2
久保義幸	1
蔵川正□	1
倉沢和夫	1
倉田重吉内	1
倉田俊	3
倉田白羊	27
小池新次郎	1
河野通明・俊達	1
河野通勢	3
小里頼永	1
小澤克己	1
小平勝□	1
後藤たかよ	1
小林章	13
小林奇子	1
小林袈裟治	1
小林先治	3
小林三郎	121
小林三郎・鷹野悦之輔	1
小林多津衛	1
小林歳衛	20
小林虎男	1
小林光沼	1
小林吉浩	1
小山良一	1

差出人氏名	信書点数（点）
財団法人碌山美術館	2
桜井亀孝	2
笹村草家人	67
佐藤貢	2
佐藤貢・しな	1
佐藤雄田郎	1
塩沢貞雄	3
塩沢隆平	4
重子従史	1
信濃教育会	4
信濃絹絲紡績株式会社	1
島崎楠雄	5
清水利雄・上羽文雄・藤城照子	1
下村桂一	4
白石今朝夫	1
鈴木迪三	5
鈴木優	1
関□郎	1
関克彦	2
関四郎五郎	1
曽根原周平	1
対山館	2
鷹野悦之輔	13
鷹野悦之輔・出一	3
高橋次郎	1
高橋友武	3
高橋雅子	1
高橋康男・雅子	1
瀧川太郎	2
滝沢石	11
滝沢澄江	3
竹内□□	1
竹内定古	1
竹内隆夫	1
竹内富	1
竹田隆夫	1
竹内宣守	3
竹中隆夫	1
田子正太郎	1
田瀬悟郎	1
田玉逸作、田玉孝平	1
田玉孝平	53
竜野八郎	11
田中重弥・降旗徳弥	1

差出人氏名	信書点数（点）
田中武子	1
田中不二子	1
谷口ともを	1
田原幸三	19
田原正章	1
小県上田彫塑研究会	2
千村静子	1
忠一	1
辻村深治	1
鶴田吾郎	1
手塚基	1
寺島長虎	1
陶山光雄	6
徳竹俊三	1
所四出男	7
知生	1
永井昭	1
永井喜平	1
永井政茂	1
永井政義	2
長尾秀次	1
中川元三	6
長坂きくじ	48
長坂猛・長坂きくじ・小泉敏範	1
長坂利郎	15
中嶋亀孝	1
中島謙吉	6
中島正信	1
中嶋操	1
中西悦夫	2
中西義男	1
長野県穂高町役場学園都市誘致東京連絡所	1
長野市図画教育研究会	1
長野市図画研究会	1
長野美術研究所	1
長原坦	1
中村清太	1
西川宗舟	2
農民美術研究所	1
箱山茂平太	1
長谷川健	1
長谷川正雄	1
花岡たかよ	14
林勇	14
林貞三	3

差出人氏名	信書点数（点）
林八十司	1
原才三郎	9
原才次郎	1
原田豊三郎	2
原千賀	1
原千賀雄	1
原正雄	1
原弥三郎	2
原弥二郎	1
原良三郎	1
針塚長太郎	1
半井武	1
飛矢崎和彦	3
飛矢崎真守	4
平尾義雄	2
平林感人	2
広口文口	1
福田豊子	1
福田庸雄	2
福家靖夫・あや	3
藤井益二	1
藤井竜二	1
藤田富雄	2
藤森とし子	1
降旗和夫	1
古沢肇	2
牧岩太郎	4
増田国雄	12
増田國雄・佑一	1
増田安衛	10
増田祐一	1
町田則吉	7
町田ます子	1
松岡弘	1
松尾砂	7
松尾卓見	2
松原為雄	1
松原常雄	8
松村秀太郎	1
丸山口三彦	1
丸山清人	2
丸山為三郎	1
丸山太郎	1
三澤巌	1
満夫	1

差出人氏名	信書点数（点）
南賢治	2
南賢治・玉衣	1
峯村茂喜	1
美統台憲	1
宮川兵太	1
宮坂彦一	16
松村七郎・三冬	1
召田潔	1
百瀬一清	5
百瀬金吾	1
百瀬慎太郎	1
森泉重松	1
守屋昇	1
矢島正一	1
安原新次	1
矢津栄雄	1
柳澤正直	1
山浦波	1
山岸武	1
山口進	4
山口定次郎	1
山越修蔵	1
山崎晃	1
山崎貴示	1
山崎斌	2
山下一平	2
山城修口	1
山田稔	1
山中丁郎	1
山本鼎	64
山本鼎・家子	2
山本鼎記念館	1
有限会社小林写真館	1
有限会社田玉製作所	1
吉江善男	1
米山直昭	1
両宅博	1
RESTAURANT50BAN	1
六口野武一	1
鷲沢次郎	1
和田口口	1
和田寿一	1
渡辺進	1
計	1140

※50音順、口は未判読文字